

# めぐみイエス・キリスト教会

2023年4月23日(日) 第四主日礼拝

午前10時より

週報「通算第654号」



## 2023年標題聖句

### 第 I ヨハネの手紙第5章4節～5節

《神から生まれた者はみな、世に勝つからです。私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝った勝利です。世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか。》

第一礼拝(教会にて) 毎週日曜日 午前10時～11時

第二礼拝※中止

聖書の学びと祈り会 毎週水曜日 午後6時～(各家庭にて)

牧師 鈴木 竜 実  
ますみ

※当教会は、モルモン教、エホバの証人(ものみの塔)、統一教会(原理福音)とは、一切関わりがありません。

## ◎礼拝プログラム

【前奏祈祷】

【賛美Ⅰ】 新聖歌392「主の愛の汝がうちに」p. 631

【交読文】 No.29 詩篇第95篇 p. 903

【賛美Ⅱ】 新聖歌127「墓の中に」 p. 178

【使徒信条】 【主の祈り】 【先週説教】

【賛美Ⅲ】 オリジナル曲No.1「復活の日の朝」

【聖書朗読】 使徒の働き24章22節～27節(新約p. 286下段)

【礼拝説教】 《カイサリアにおける二年間》

【聖餐式】

【賛美Ⅳ】 新聖歌166「威光・尊厳・栄誉」 p. 236

【平和祈り】

【頌 栄】 新聖歌63 「父・御子・御霊の」 p. 85

【祝祷後奏】

### ●ポイント1「ローマ総督フェリクスとその妻ドルシラ」とは？

■フェリクス 紀元52年から59年までの、ユダヤの総督。フェリクスは、解放奴隷を地方官に任命するクラウディウス帝の政策によって、ユダヤの総督になった。総督としてのフェリクスは、ローマの武力を頼み弾圧によって治安維持をはかろうとしたが、過激な反ローマ主義者の徹底的な反抗にあい、カイサリアで混乱が生じた時、ユダヤ人多数を殺害するなど、あまりの強圧的な統治のため、ユダヤ人の代表たちがローマへ行き、フェリクスを訴えた。彼は処罰を免れたが、ネロはフェリクスに代えてフェストゥスをユダヤの総督とした。

使徒の働きにおいて、ユダヤ人にとって最も大切な宗教に対して、彼がかなりの関心を払い、主イエスを信じる者たちについても詳しい知識を持っていたことを示している。また、「パウロを呼び出し、キリスト・イエスに対する信仰について話を聞いた」際、個人的応答を求めて解き明かすパウロの弁明に、信仰告白への大切な最終段階において恐れを感じ、

決定的瞬間に決断を延したことをルカは伝えている。これは、彼のユダヤ人の妻ドルシラとの結婚の罪が示されたと思われる。また、彼の物事を延期する態度については、ルカの記述の中で繰り返し指摘されている。

■**ドルシラ** ヘロデ・アグリッパ1世の3番目の子で、紀元38年に生まれ、アグリッパ2世の妹に当たる。兄のアグリッパ2世は、ドルシラをシリアの小心のアジザス王と結婚させた。アジザス王は改宗して割礼を受けた。

しかし、使徒の働きでは、フェリクスの妻ドルシラとして登場するが、それは、ローマから遣わされたユダヤの総督フェリクスがドルシラに思いを寄せ、ドルシラもユダヤ教の律法に背いて夫と離婚をし、フェリクスと結婚したからである。彼女は夫と一緒に、パウロからキリストを信じる信仰について話を聞いた。パウロはその時、正義と節制と審判について語った。

### ●ポイント2「パウロのメッセージにフェリクスが恐れたこと」とは？

#### ※マルコの福音書6章17節～20節「ヘロデとヘロディア」（新約p.77上段）

6:17 実は、以前このヘロデは、自分がめとった、兄弟ピリポの妻ヘロディアのことで、人を遣わしてヨハネを捕らえ、牢につないでいた。

6:18 これは、ヨハネがヘロデに、「あなたが兄弟の妻を自分のものにするのは、律法にかなっていない」と言い続けたからである。

6:19 ヘロディアはヨハネを恨み、彼を殺したいと思いながら、できずにいた。

6:20 それは、ヨハネが正しい聖なる人だと知っていたヘロデが、彼を恐れて保護し、その教えを聞いて非常に当惑しながらも、喜んで耳を傾けていたからである。

### ●ポイント3「神の言葉の力」とは？

#### ※エペソ人への手紙6章17節「パウロの教えから」（新約p.392下段）

6:17 救いのかぶとをかぶり、御霊の剣すなわち神の言葉を取りなさい。

#### ※ヘブル人への手紙4章12節「生きていて力があり」（新約p.441下段）

4:12 神の言葉は生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄を分けるまでに刺し貫き、心の思いやはかりごとを見分けることができます。

## ◎先週の礼拝メッセージ【総督フェリクスへのパウロの弁明】

《ローマ総督フェリクスの所に、大祭司アナニアが弁護士テルティロと長老たちを伴って、カイサリアにやって来ました。そして、その裁判席において、弁護士テルティロは、三つの点について訴えたのです。

一つ目は、「この男は世界中のユダヤ人の間に騒ぎを起こしている者」であるということです。パウロは、『「私が礼拝のためにエルサレムに上ってから、まだ十二日しかたっていない。そして、宮でも会堂でも町の中でも、私がだれかと論争したり、群衆を扇動したりするのを見た者はいません。』』と、弁明します。

二つ目は、「ナザレ人の一派の首謀者」であるということです。『「私は閣下の前で、次のことは認めます。私は、彼らが分派と呼んでいるこの道に従って、私たちの先祖の神に仕えています。』』と。当時、主イエスの教えは、「ナザレ人の一派」として、ユダヤ教の中の一つの派として考えられていました。パウロはそれを認めています。

三つ目は、「この男は宮さえも汚そうとした」と言うことです。パウロは、『私は、同胞に対して施しをするために、またささげ物をするために、何年ぶりかで帰って来ました。そのささげ物をし、私は清めを済ませて宮の中にいるのを見られたのですが、別に群衆もおらず、騒ぎもありませんでした。ただ、アジアから来たユダヤ人が数人いました。もしその人たちに、私に対して何か非難したいことがあるなら、彼らが閣下の前に来て訴えるべきだったのです。』』と、弁明します。

「アジアから来たユダヤ人」とは、アジア州の首都エペソからやって来た者たちのことです。彼らは、パウロとエペソ教会指導者・ギリシヤ人トロフィモを良く知っています。その彼らが巡礼に来た時に、エルサレムにおいて、この二人を見かけたのです。そして、パウロが宮の中に異邦人トロフィモを連れ込んだと錯覚したのです。この現場を、大祭司アナニアとテルティロは、見てはいないのです。》

## ◎お知らせ

※次回第五主日礼拝は、4月30日(日)午前10時からです。